



大きくなつた子どもとつきあう(2)

津守 真

毎週二回コロニーの体育館で行われる「音と動きの活動」(注)のクラスで私が出会うH子は、いつも時間になる前に来て待っている。両手で膝を抱えて床に座っていることが多いが、とても表情が良い。私はその姿勢が、いまの彼女の表現なのだと思うている。このクリエイティヴダンスは保育と考え方が同じで、従うべき型はなく、だれでも自分らしく動くことを大切にしている。リーダーはそのような場をつくる働きをする保育者である。二十四時間を寮で過ごしている人達は、寮の外で、自由な気持ちになって表現する場を求めている(注 ウォルフガング・シュタンゲのクリエイティヴダンス、障害をもつ人を加えて行うが、障害をもつ人を劣った人とみるのではなく、違った能力をもつ



人とみて、ひとりひとりの小さな動きをたいせつにするダンス運動。英国で盛んである。

H子は頻繁に体育館の一隅にあるトイレに通う。そのたびに、私の頭を指先で叩いて行く。次第に分かったのだが、トイレでは水洗の水を流して手を入れるだけである。毎回繰り返すこの行動をどう理解したらいいのか、いつも私の心はとまどっていた。

私はH子が幼児のときに母子愛育会家庭指導グループで二年間ほど、週一日保育をしていた。雑巾を水にひたして持ち歩くので、私は床を拭くのに忙しかった。地域の小学校に行ったので、私は会うこともなく二十年を経て、この子が幼児期のことを私はほとんど忘れていた。最近になって、そのころの記録を読み直し、鮮やかな記憶がよみがえった。私が養護学校の校長になる以前のこと、保育研究の考え方を転回させた初期である。H子との水のつきあい、そのときには未だ文章に書ける心境ではなかった。いま取り出してみるとはつきり分かることがいくつがある。

幼児期のH子から私が学んだこと

水に手を入れる―生命性

「H子がトイレの水道の水を洗面器の中に一杯出し、勢いよく盛り上がった水の中に手を入れている。その水は洗面器の排水口から流れながら、逆流して洗面器にたまる。そこに手を入れている。H子は私の手をとってシャワーの水栓をあげさせる」(一九七五



年H子四歳のとき)。子どもの側からいうならば、手は身体の一部にとどまらず、自分自身の全体と考えてよいだろう。実際、手を水に入れていこうちに、子どもは全身水の中に入ってしまう。泡の盛り上がる水は生命性そのものである。H子は生命性の中に自分自身をおく。激しく噴出するシャワーの水を体につけ、石鹸を体にぬり、シャワーで流す。

大人の感情とH子の反応

H子は私の手を水栓にもっていき、もつと強く水を出させようとする（私が水栓をコントロールしていることを知っている。それに対する反逆的反応である）。水の中に手拭を入れ、雑巾を入れる。水はざーざーと下に溢れる。心の中に何かがいっぱいあつて溢れ出るほどなのだろう。私が水栓を一杯に開くまで、私の手を水栓にもって行って要求する。私は正直のところ、こんなに応えているのもつと要求するのかと、むらむらした気持ちで水栓をいっぱいにあけた。そうするとH子は流れ落ちた水を手でいじったり、モップでこすったりしている（大人は自分自身の許容の限界を越えて行動するのは感情の助けを要する。むらむらというのは、相手に対する攻撃の衝動的感情である）。

H子は私の手を引いて、シャワー室に入ったので、私は湯を出した。私は自分の感情を子どもにぶつけることを恐れて、見えないところにかくれた。H子はシャワーに長い時間入っていた（私から受けた攻撃感情―むらむらした気持ち―を流すために長い間



シャワーを使っていたように思う。午後は水栓を自分で開き、水を出したり止めたりして、自分がコントロールすることを試みていた。それから雑巾を水につけ、水をあふれさせた。私が抱いてもすぐに逃げた（私との間の感情を考えれば当然である）。H子が水をしているときに傍観しているのは、よくないようだ。いつ止めようかと監督しているのもっとよくない。一緒に水をたのしむのが必要なようだ。他の子もいるので一緒に楽しむのは大変むずかしい。

H子がシャワーをしていた時に、O先生がシャワーをとめた。水をやめさせればもっといろいろな遊びをするだろうと考えてそうしたのだが、H子は楽譜をトイレにつめようとした。これは大人の価値観の限界を越えることである。O先生がそれをとめたら、ちり紙をひとつかみトイレに入れて水をあふれさせた。それをやらざるを得なかったとき、O先生自身いかに惨めな気持ちになったかをO先生は語った。この子とつきあった時にだれでもが抱く感想である。

思いきってかかわる

次の日、私は他のことをおいてもこの子と本気がかかわろうと考えて保育に臨んだ。そして子どもが納得するまで付き合った。その日、H子はトイレに入り、フラッシュを押して水を流し、便器に手をいれた。水の激しい音がした。本人には激しい触覚が感じられていただろう。私もトイレに入り、H子と同じように便器に手をいれてフラッシュを押した。H子と私とは目の高さが同じになり、H子は何度も私の顔を見た。何か対等



の位置に立ったように思った。H子は数度流して手を入れてから、私の手を引いて庭に出た。この日はトイレの水はそれだけで終わった。H子は私の手を引いて庭を一緒に走った、こんなことは初めてである。何度も部屋に入ったり庭に出たりする。

午後からシャワー室で

私はH子と一緒にシャワー室ではだしになり、デッキブラシと一緒に床をこすった。H子は私を見て笑った。私は、水がかかっても逃げないでびしょびしょになっていた。H子が手にもっていたシャワーをかりて、H子と同じように窓や壁に押し付けた。角に押し付けると水が滝のように落ちる。H子は私がやるのを見ていた。H子がシャワーを口にする私も口にした。こうしているとシャワー室の中もたのしい。H子は、私を見て笑う。他の子が入って来るとその子と向かい合って笑った、H子はその子の肩や足を手でさわりその子を見て笑った。しばらくして、H子はたらいをひっくり返して水を自分から終わりにして出てきた。私の手を引いて室内に行き、トランポリンをした。私に寄りかかり、私はH子を抱いて庭に行き、抱いたまま庭を何度も往復した。H子はうれしそうである。私は他の子と滑り台をすべっていたとき、H子に声をかけた。気がつくるとH子も一緒に滑り台の階段を上っている。こうして何回も滑り台を滑った。今日はH子をはじめてのことを沢山した。私との間でもうれしそうな顔を数え切れないほど見た。他の子とも笑い合った。落ち着いて抱かれ、ひとつのことをゆっくりとやった。朝のトイレの場面から始まり、私は、H子との間のことをたいせつにしようと思った、よ



そめにどう見えようと構わずにやった。きっと、H子から見たら、私は優しい顔をしていたと思う。いままで、水をやらせもしたし、それを見守ることもした。しかし私の顔はこわい顔だったろう。少なくとも親しい顔ではなかったろう。きょうのH子と私との間は柔らかかった。

今日の私の態度は、数日来「保育の体験と思案」(p47-49)を書きながら、附属幼稚園の森の組の子どもに対する私の在り方を考えてきたことから気がついたことである。保育においては、自分と子どもとの間を大切にすることが第一である。私はこの日頃、子どもとの間に徹していなかった。それだから、今日は実習生のTさんに「先生は今日は久しぶりに童心にかえったようですね」と言われた(一九七六年春H子五歳のとき)。

阻止すると噛む―断水の日

断水だというので、バケツに水をとっておこうとしたら、H子は水栓と石鹸とタオルをもって、トイレに行った、水が出ない。私に水栓をあけると手を引くが水が出ない。H子はワーワー叫び泣き、足踏みをした。シャワー室の水栓をひねると水がたらたらと出るが、H子は見向きもしない。断水のことを説明するが、ききめはない。五分ほどで水が出た。すると、H子は怒ったように私をシャワー室の外につきだした。水が出なかったのはあなたのせいだというみたいだった(この傾向はいまも同じである)。そばにいようとすると、また外へ突きだす。こんなことははじめてである。こんなに泣きわ



めいたのはじめてである。H子の水を阻止するとどうなるかが良く分かった。

この間に他の子が水をとめにいったら、H子が噛みついた。その子は、H子にとびかかり、取っ組み合いをした。H子は、はらはらして見られていることが多い。私は本気になって付き合う人になりたいと思った。

人と一緒にいることを求めている

H子は帰りの歌のとき、すつと来て手をつないだ。皆のなかに入りたい気持ちがあることはいろいろの場面で察せられた。

二十年後

H子がコロニーで夜も昼も過ごすようになったとき、その最初から彼女は体育館での「音と動きの活動」に喜んで参加した。しばしばH子は私にとびかかり、髪の毛を引っ張り、噛みついた。大きくなった人のこのような行動に出会うとき、私共は恐怖を感じ、身を避けるのが常である。私もある時期、H子を避けた。そのうちに私は、H子の心と真正面から向き合わないから彼女はますます激しく私に向うことが分かってきた。

そこで、H子と向かい合っている、私が受け身になるだけでなく、私もエネルギーを出してH子に向かっていくようにした。

「この日H子は、最初私に頭を打ちつけ手に噛みついた。私はしばらくぼーっとする位だった。何度もやろうとするので、私は「やらないで」と止めた。そのあと、H子は動



かなかった。H子は私にやったあと、孤独を感じていたのだと思った。この日は朝から、F先生にひどかった。昼食のときも何度もいろいろの職員にとびかかろうとしたので、私は早めにH子を体育館に誘ったのだった。音楽がかかると、H子はすぐに私に向かってきて、髪を引っ張ろうとし、私の手に噛みつきこうとした。何度も激しくやろうとした。はじめ私は受け身になり、向かい合った姿勢でH子が前進すると私は後退した。次に私が積極的に前進し、H子が後退して歩いた。H子は声を出して笑った。それでもH子はチャンスがあれば手を伸ばして髪を引っ張ろうとした。まもなくリーダーのA先生が来た。他の人達が手をつないで長くなって歩いていると、H子も皆の輪につらなっていた。何度もトイレに行った（一九九四年秋H子二十三歳のとき）。

こんな具合にして半年以上が過ぎた。H子が太鼓を叩くと大きな音で一本調子で叩くので、みんなが辟易することもあった。H子と音楽と一緒に歩きながら、私はこの子の過去には辛いことがどんなに多くあったろうかと想像した。私がH子の後ろ側の床にすわると後ろを振り向いて噛みつきこうとした。後の下方の空間は複雑に捻れているみたいに見える。後ろのことは忘れて前に向かって歩こうと私は話しかけながら手をつないで歩いた。

「この日も何度も噛もうとした。H子が声を出してしゃがんでいた。私とのかかわりを求めているように思った。体育館の音と動きの場は、そんな自分をも表現できる空間である。しばらく私とH子と二人だったので私は専念してかかわることができた。これま



でH子は自分が理解されず受け入れられないままに、学校や施設を転々と変わってきたことを知っていたので、私はH子さんも苦勞が多いねなど話しかけながら音楽と一緒に歩いた。そしてついにも激しく噛みついたH子の心の内を察した。こうして三十分程を過ごした」(一九九六年H子二十五歳のとき)。

その後、私共はいろいろと考え、相談し、H子さんは大勢の人が居住する施設の生活が嫌なのだろうと考えた。そして近隣でグループホームを開いている方の家に移り住み、昼間の活動だけコロニーに通うようにした。普通の家庭に住むことが分かったとき、一、二週間でH子さんの激しい行動はほとんど全くなかった。施設からホームに環境が変化することがこんなにも重要なことがよく分かった。それからほぼ一年たつが、噛みつくことはほとんどなく、「音と動きの活動」にもこにこして参加している。

最近もA先生がリーダーの日、ふたり組みになって背中を合わせ、呼吸を感じるといふ場面があった。する人もありしない人もあるのだが、H子さんは私と背中を合わせ呼吸を合わせて数分間を過ごした。背中のぬくもりを通して何かが通じ合った。彼女はこにこ笑っていた(一九九七年春H子二十六歳)。

二十年前の幼児期と現在とを並べてみると、共通点を多く発見する。

1 水



H子はトイレにしばしば行く。フラッシュを押して手を入れるのだが、激しく流れる水のイメージを感じている。H子は幼児期も現在も激しく動く水のイメージをもって生きていく。

2 噛む

H子は他人からの拒否や攻撃の感情に遭遇すると、噛んだり、髪を引っ張ったり激しく行動する。H子が噛みつくときは、他人からの拒否や攻撃の感情を感じているときと考えるとよいだろう。

3 思いついてかわる人を求めている

中途半端な気持ちでかわっていかけてはだめである。この人は対等になって本気で付き合う覚悟をする人を求めている。このことは幼児期も現在もかわらない。

4 人と一緒にいることを求めている

あるときは対一の親しい関係を求めているが、それだけでなく仲間の中に参加することを求めている。そのことは幼児期の生活にも見られるし、大人の生活でも同じである。

私がH子さんの幼児期のことを次第に鮮明に思い出したように、H子さんもかつての私との付き合いを覚えていたのかもしれない。親しみと怒りと両方をこめて。子どもは日々新しく眼前のできごとと取り組んで二十年を過ごし、いま大人として私とかかわっている。私も同様である。